書　評

ケミカル・ルネサンス
－化学産業の未来が見える－

編著者：吉田　邦夫
発　行：丸善㈱
定　価：760円（本体）
評　者：小山　　清（大阪市立工業研究所）

本書は，丸善ライブラリー272として刊行された書籍である．今日の化学産業は基礎素材を自動車や家電メーカーに提供するばかりでなく，一般消費者に接する下流にまで進出している．これらの実態を理解していただくことを一つの目的として記されている．

本書は6部から構成されていて内容は次のようになっている．第1部は，日本の化学産業の現状と課題として，国際化のパターンに乗り遅れた化学産業が直面する課題の総括とともに，国際化への動きを欧米化学産業の動きと対比させて，整備すべき経営基礎について考察している．第2部は，成長産業を支える化学として，自動車や電子工業などの国内外の成長産業を支えてきた日本の化学工業について，このような成長産業も日本の化学技術がなくては動かないと考えられる．このような視点から日本の炭素繊維，エンプラ，ケミトロニクス（電子産業用化学品）などに焦点を当て各産業の特徴とその未来について記されている．第3部は，日本の化学企業の経営戦略として，成長性と収益性に過去の法則があてはまらなくなった時代に，どのような戦略策定のプログラムを作成し収益を確保すればよいか，また，グローバル化の中で海外展開をどのように考えていけばよいかについての考え方を展開している．第4部は，ユニークな化学会社は成功するとして，個性的な経営により，種々の課題を解決しながら成長と高収益をあげている優良企業の特徴を具体的に社名をあげて成功例を紹介している．第5部は，情報化時代の化学として，各産業・企業の情報化が急速に進展していて，情報技術（Information Technology）の改革は化学産業が先鞭をきっている．産業界の動きと化学教育，研究分野での情報技術の変化について考察している．第6部は，化学産業の歴史と進化として，歴史が化学の面白さを教えられ，我々の身の回りにある材料への理解を大切にして，化学産業の歴史が理系や文系に関係なく現代の社会生活で夢を与える身近で親しみやすい知識となるよう，身近な例をあげて化学と産業の歴史を解説している．

本書は，文明の基礎を支え，人類の未来を切り拓いてきた化学には，いま何が求められているのか？という課題に対し平易に解説されていて，これらの課題に対して理解が得られ，たいへん興味深く読むことができる．是非，一読されるようお薦めしたい．

書　評

環境「利益」

著　者：A. B. Lovins, L. H. Lovins
　　山藤　泰訳
発　行：KBI出版
定　価：2,000円（本体）
評　者：吉田　邦夫（東京大学名誉教授）

ソフトエネルギーパスという概念を提唱して，エネルギー研究者に衝撃を与えた筆者が再び斬新な主張を揚げて登場した．すなわち「気候変動の防止は収益性があるもの」ということを数々の例を挙げて説き明かす．地球環境の保護には多大の費用がかかるとするのは旧来の経済理論にとらわれた考えであり，エネルギー利用効率化への投資は十分に回収できるとする．

燃料電池，太陽電池，風力などが果して著者の考えるような効率，コストで実現できるものかなど議論の余地は沢山ある．しかし，ここに述べられた事例を日本に当てはめるとどうなるか，規制が問題であるとするが，そのアメリカ以上に規制の多い日本ではどうなるなど早急に検討が始まることを希望したい．地球環境問題に関心のある方に一読を勧める．